

「普通おばんざいとは言わない」の・・・なぞとき

藤掛 進

1. 疑問の提示となぞときの始まり

家庭のおかずいわゆるおばんざい

この表現は、2013年（平成25年）に京都市が創設した「市民が残したい“京都をつなぐ無形文化遺産”制度」の第1号として、「京の食文化—大切にしたい心，受け継ぎたい知恵と味」を選定した際に、暮らしが育む食文化の中の項目に書かれた表現である。このいわゆるという表現は実に面白い。実に見事な落としどころを見つけたものである。

また内容・特徴として以下のような記載がある。

—家庭のおかずいわゆるおばんざい—

京都で受け継がれている日常的な家庭料理。味付けは出汁をベースに、旬の野菜など季節の食材を無駄なく使いきるよう工夫された料理。

とした上で、さらにカッコ書きで次の文が加えられている。

京都の家庭では普通「おかず」と呼ばれている。「おばんざい」という言葉は、1964年に大村しげらが新聞のコラムで「おばんざい」という連載を始めてから、全国的に広がったもの。同じ或いは近い意味で使われてきた言葉として「おまわり」や「おぞよ」がある。

このカッコ書き、わずか百数十文字の中に実は「おばんざい」に関わる人たちの葛藤が見え隠れしている。並みの推理小説以上の面白さが存在していそうなのである。

このカッコ書きの文を整理して項目別に列記すると

①. 京都の家庭では普通「おかず」と呼ばれている。

⇒即ち、京都の家庭では普通おばんざいとは言わない。だとすれば、なぜ言わないのか。

②. おばんざい」という言葉は、1964年に大村しげらが新聞のコラムで「おばんざい」という連載を始めてから、全国的に広がったもの。

⇒その通りだが、この表現は「おばんざい」という言葉は、新しい言葉であるとあえていっているようにとれる。京都では歴史の長さが大きな問題となる。またおばんざいという言葉が、大村以前に存在したかどうかについてはふれていない。

③. 同じ或いは近い意味で使われてきた言葉として「おまわり」や「おぞよ」がある。

⇒京都の家庭では日常的な家庭料理を「おかず」と呼んだり、「おまわり」、「おぞよ」と呼んだり、色々のようにだが、その使い方、使い分けについてはここでは言及していない。

以上のようになるが①については最も面白い展開が期待されるので後回しにし、まず②及び③について考えてみる。

2. ばんざいという言葉は江戸時代からあった。 ②の疑問に関して

おばんざいの「お」は、次に来る言葉の丁寧さをあらわす接頭語であるから「ばんざい」が本来の意味をなす語である。

「ばんざい」をどう漢字で表記するかは議論のあるところだが、これまで大村が初期のころに表記した飯菜（ご飯とオカズ又はご飯のオカズ?）、大村しげの理解者のひとりであった松本章男が記した晩菜（晩のオカズ?）、そして番菜（粗末なオカズ?）と書かれているのを確認している。

大村しげは、1970年代までは「お飯菜」と記しているが1980年代に入り、後述の年中番菜録の存在を知ってからは「お番菜」と表記している。その年中番菜録は、1849年（嘉永2年）の作といわれ。ここでは番菜の表記の他に、番ざい、ばん菜、ばんざいと漢字とひらがなを組み合わせ4つの表記が使われている。

これらの事実を踏まえたうえで、その他の漢字表記がその根拠に乏しいこともあるから、ばんざいの漢字表記は「番菜」でよいと思える。

年中番菜録が存在する事実から、ばんざいという言葉は、少なくとも1849年以降には存在している。京都府では、100年以上で「老舗表彰」が受けられるはずだから、ばんざいは160年を超えているのでりっぱな老舗なのである。決して新参者ではない。

もちろん、大村が使用した年から数えたとしてもすでに50年、この年月がそれほど短いとは思えない。

3. おばんざい、おかず、おまわり、おぞよの比較 ③の疑問に関して

おばんざいは【お+ばんざい】の文字構成であり、同じようにおかずは【お+かず】、おまわりは【お+まわり】、おぞよは【お+ぞよ】である。ここの【お】は女房詞といわれ、付けることによって次に来る言葉の丁寧さをあらわす接頭語であるようだから、これらの言葉の意味を実質的に考える場合、この【お】を取り去って考える必要がある。

つまり「ばんざい」、「かず」、「まわり」、「ぞよ」の比較である。漢字は表語文字なので、これらを漢字に変えて比較すると解りやすいことから、どの漢字をこれらに当てるかを考えながら話を進めたい。

(1). ばんざいの意味

ばんざいの「ばん」の漢字は「番」を当てて考えるとすると、番の字は「常用の・粗末な」の意味を持ち、菜は「あおもの、野菜、おかず、副食物、一汁一菜」などと新漢語林には記されていることから番菜＝粗末なオカズという意味でよいだろう。

(2). かずの意味

「かず」に対する漢字は「数」を当てている場合がほとんどの様だ。「数を取り揃える」の意味で使われている。数を取り揃えるということは、沢山の種類を用意することを意味する。一つの膳に盛れるものは限られるから、例えば本膳料理のように、一の膳、二の膳、三の膳などといった具合に一つの御膳だけでなく、沢山の種類の料理を盛った沢山の御膳をも

意味することになる。こうなるととても庶民のものではない。地位も財力もある高貴な方々か、時の権力者、或いは大金持ちの人達の食事であると考えてよい。

(3)まわりの意味

「おまわり」の漢字表記は、「周り」であろうか。残念ながら正確には記憶していないのだが、熊倉功夫氏の講演にて、おまわりとはご飯のまわりにある副食の意からきているときいたことがある。この漢字を使うとなると一つの御膳のご飯のまわりにあるいくつかの副食となるので沢山の御膳を擁する「数」よりは貧層となる。

大村は、「おまわり」について下記のように述べている。

おまわりのことは、聞くところによりますと、上つ方(うえつかた)では、ご飯のまわりにおかずをつけて召し上がったところからおかずをおまわりとおっしゃったようでいつのまにやらわたしたちもおまわりというようになりました。(大村しげの京のおばんざい 暮らしの設計 133号 中央公論)

これも「周り」の漢字がふさわしい。

もう一つ、「回り」という漢字のほうが適当だとする解釈を述べているのが松本章男である。松本は、

おまわりとは昔、馳走を大皿に盛って会食者に取りまわしてもらったところに生まれた言葉らしい。

(京のおばんざい 四季の味ごよみ 光村推古院 2002年)

としている。この解釈には、「回り」の漢字の方がふさわしいかもしれない。しかし「おまわり」を家庭での日常的な食事という設定で考えると、大皿の馳走を家族で取り回すという行為は想定しにくい。仮に職住一体型の商家のような大家族を想定しても、住人が一緒に食事をとることなど殆どなかったようなのでここでも取り回すことはないであろう。取り回すことがあるとすれば、直会など地域の神事などで行われることはあるかもしれない。しかしこれは日常的な食事ではない。従って「周り」の漢字の方がふさわしいであろう。

(4)ぞよの意味

「ぞよ」については、「雑用」と記すという人と、「雑余」とする人がいるようである。「雑用」はそれこそ年中番菜録での漢字表記と同じである。年中番菜録では「ぞうよう」と私は読んでいたが、「ぞよ」と読めなくもない。

「雑余」と表記するのは、松本章男である。

おぞよのほうは、漢字を当てると「御雑余」になる。「明日からてんてこ舞いやからおまわりをつくれへん。何か日の保つおぞよを炊いどかんならん」母はそういう風にこの言葉を使った。おから、ひじき、お豆さんの炊いたん。そういう安上がりのおかず、時に当座(のぎ)のおかずがおぞよである

(京のおばんざい 四季の味ごよみ 光村推古院 2002年)

漢字の意味を調べてみると、「雑」の漢字は、まじる、純粹でない、粗い、いやしいなどの意味がある。「用」は役立たせる、働き、器に盛った供え物などの意味で、「余」はあまり、残り等の意味である(新漢語林)。これらの漢字の意味から見ると「雑用」は「いやしい供え物」、「雑余」は、「いやしい残り物」などとさえ解釈できることからあまり上等な食べ物では無いようである。

「おぞよ」について大村は、

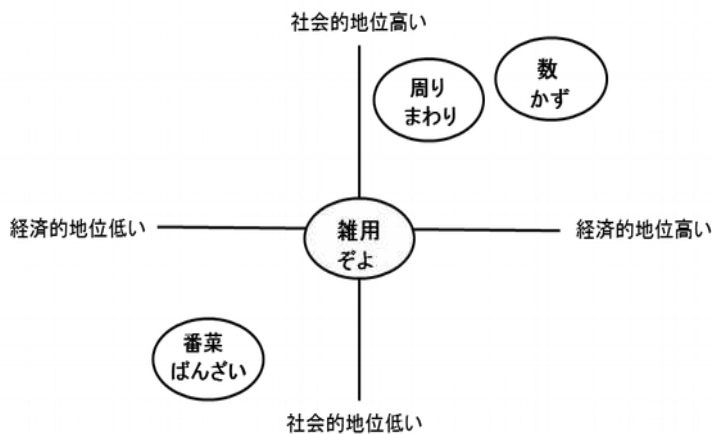
わたしたちの使い方からいいますと安うてぎょうさんあるものがおぞよです。(大村しげの京のおばんざい 暮らしの設計 133号 中央公論)

と述べている。このことと先の松本章男の文章を合わせて考えると、漢字で表記される上述の意味ほどの暗いイメージは、「おぞよ」に無い。むしろ家計を厳しく切り盛りしながら、急な対応もできる賢い主婦の証拠であるように聞こえる。「おぞよ」は、その語の意味するところとは大きく異なり、京女の誇りさえ感じることのできる不思議な言葉である。

(5) 「ばんざい」、「かず」、「まわり」、「ぞよ」の比較

それぞれに当てた漢字の意味を基にして、4つの言い方が社会的地位と経済的地位にどのように関連するかについてマトリックスを使って整理すると、下記のように位置づけ出来ないであろうか。

①. 番菜・数・周り・雑用の位置づけ



数(かず)は、「数を取り揃える」の意から考えると、それができる人といえば、社会的にも経済的にも高い地位の人であろう。周り(まわり)については、上つ方の言葉であったとすれば、少なくとも社会的地位の在る人が想像できる。ただ一つの膳のご飯の周りと考え、経済的

に恵まれていたかどうかはわからない。

雑用(ぞよ)については、推測した漢字表記の意味からはひどく底辺の食べ物のように思えるが、大村や松本の言い回しから想像すると、それほど悲壮感はなく、むしろ誇りさえ感じるように思えるから、社会的地位や経済的地位とは関係なしに使われたのではないだろうか。

番菜(ばんざい)の意味を「粗末なオカズ」とすると、少なくとも社会的地位の高い人達の表現とは思えない。また経済的地位の高い人もこのような表現はしないであろう。

以上をまとめると、社会的、経済的地位の高い人たちにふさわしい表現は、数(かず)ということになる。しかし周り(まわり)も上つ方の言葉だからこれも品があり、天皇家或いは貴族と何らかの関連を持つ社会的地位の高い人の表現ということになりそうである。

しかし番菜(ばんざい)という表現には、社会的地位や経済的地位とは縁のない人達、むしろ底辺の人達のイメージが漂う。

(6). 「おばんざい」と「おぞよ」、「おまわり」の関係

「番菜」と他の表現との関係について、年中番菜録での記載では、

民家の食事に関東にてそう菜と称し 関西にて雑用ものと唱る献立の數々をかき集めて年中番菜録と名つけて予にしめされしを ～

と記載されていることから、関東でいう、そう菜「惣菜」と、関西での雑用もの「雑用」(ぞうよう)を「番菜」と言っていることになる。つまり雑用(ぞうよう)＝番菜という公式が成り立つこととなる。

ところが大村は、

ただわたしたちの使い方からいいますと安うてぎょうさんあるものがおぞよです。～こういうおぞよもんから上物の鯛やえびやら、みんなひっくるめておばんざいといいます。おばんざいとおまわりとは、おんなじ使い方です。

(大村しげの京のおばんざい 暮らしの設計 133号 中央公論)

としていて、彼女の中では、おぞよくおばんざい＝おまわりという形となる。

一方松本章男はこの関係について

おまわりとおぞよを包括する京言葉が「おばんざい」なのである。漢字は「御晩采」。

(京のおばんざい 四季の味ごよみ 光村推古院 2002年)

としていることから松本説では、おまわり+おぞよくおばんざいということになる。

これらおばんざいと他の表現についてまとめて記すと

年中番菜録 ⇒ 雑用(ぞうよう:ぞよ)＝番菜(ばんざい)

大村しげ ⇒ おぞよくおばんざい＝おまわり

松本章男 ⇒ おまわり+おぞよくおばんざい

となるが、これを整理し説明することはできない。式が成り立たないのである。従っておばんざいと他の表現との関係については、京都市の解説にあるように、

同じ或いは近い意味で使われてきた言葉として「おまわり」や「おぞよ」がある。

つまり、おぞよ⇔おばんざい⇔おまわりとでも解釈した方が良いと思える。

4. 「京都の人は、普通おばんざいと言わない」ことの推理 ー①の疑問に関して

先の京都市の解説では

京都の家庭では普通「おかず」と呼ばれている。「おばんざい」という言葉は、1964年に大村しげらが新聞のコラムで「おばんざい」という連載を始めてから、全国的に広がったもの。

とある。傍点の部分、「京都の家庭では普通「おかず」と呼ばれている」は、京都では「おばんざい」という言葉は使わないということをしている。さらに下線の部分、「連載を始めてから、全国的に広がった」では、新聞のコラムが全国に広めただけであって京都では使われないことばだと暗に示しているように思える。

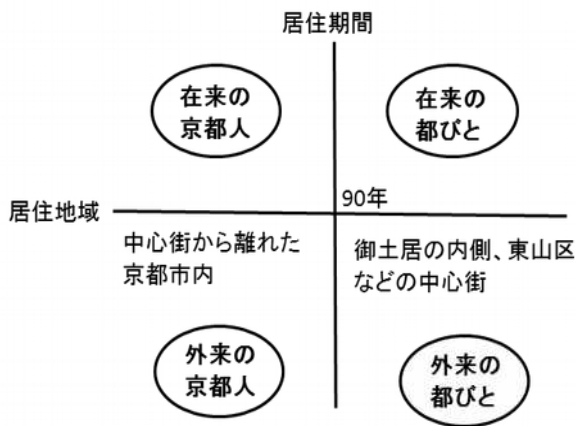
「おばんざい」という言葉が無かったとは書いていないから、あったのだが、使ってはいなかった、使っていないと解釈できよう。何故「おばんざい」と言わなかったのか、何故「おばん

ざい」という言葉をつかわなかったのか？この理由を推理してみよう。

(1). 京都住民の分類

まず、ここでこれを推理する筆者の立場を明らかにしておきたい。筆者は、外来の京都人である。外来の京都人とは、京都市に住んでまもない人やよその地域から来た京都を愛する人と考えて頂きたい。一方、京都市に代々住む人たちを在来の京都人とよんでいる。在来の京都人とよぶには少なくとも祖父或いは曾祖父の時代から京都市内に住んでいること、つまり1代を30年とすれば90年近く京都市に住んでいることを前提としている。これが在住期間を基にした筆者の分類である。

②. 京都の住民の分類



もう一つ、京都市内の住んでいる場所によって「都びと」と呼ぶ人たちと「京都人」と呼ぶ人たちに筆者は分けている。

都びとは、おおよそ秀吉の御土居の内側と、鴨川の東、現在の東山区あるいは左京区の南部辺り、つまり京都市の中心街に住まわれる方たちをよんでいる。それ以外の京都市内在住の人達は京都人とよんでいる。これを整理すると左記の②. 京都住民の分類のような図になる。

この図を見ればわかるように、外来の京都人が、京都のことに関して何かものをいうのは少しはばかりがある。歴史と天皇を重んじる京都にあっては、歴史の短い家や天皇の住まいから遠いところの住民の発言には、重みがないのである。従ってもっとも重要な存在として市民から認められる、いわば発言力のある人は在来の都びとということになる。

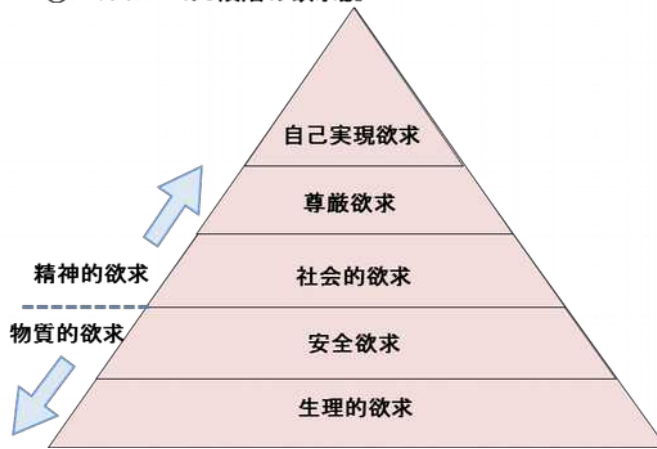
筆者は外来の京都人であるから、もちろん発言力はないし、この問題に関する私の推理もいかなれば、よそ者のたわごとでしかない。従って遠慮なく推理し書いていくことにする。

(2). 推理していく為の道具

この問題の推理行方際、筆者の感性だけでは非常に頼りないことから何か社会に認められた論理的な考え方、あるいは道具がないかを探してみると、ひとつおもしろいものを見つけた。それは、マズローの5段階の欲求説とよばれているものである。簡単に言えば人間の欲求は5段階のピラミッドのように構成されていて、低階層の欲求が満たされると、より高次の階層の欲求を欲するという説である。

最も低い第一の階層の「生理的欲求」とは、生きていくための基本的・本能的な欲求（食べたい、寝たいなど）をいっており、この欲求を満たすことができれば、次の階層を求めることとなる。

③. マズローの5段階の欲求説



第二の「安全欲求」は、危機を回避したい、安全・安心な暮らしがしたい（雨風をしのぐ家・健康など）という欲求が含まれている。

次の「社会的欲求」は所属と愛の欲求とよばれ、愛情やつながりなどの情緒的な人間関係の中で、他者に受け入れられ、グループ（家族・地域・会社・国家など）へ帰属していきたいという欲求である。

この欲求が満たされない時、人は

孤独感や社会的不安を感じやすくなるといわれている。

次の「尊厳欲求」は、承認（尊重）の欲求とよばれ、自分が集団から価値ある存在と認められ、尊重されることを求める欲求である。

次に出てくるのは、「自己実現の欲求」。人間には、自分にしかできない固有の生き方をしたい、自分の可能性を最大限に実現したいという欲求があり、ここまでの欠乏欲求が満たされた場合にそれを基礎にして出現する。自分の思い描く夢を実現したいという欲求、自分の持つ能力や可能性を最大限発揮し、具現化したいと思う欲求などである。

この欲求説には、幾つかの問題もあるようだが基本的な欲求の段階の整理には定評がある。そこでこれを推理していく為の一つの道具として使いたい。

(3). 「おばんざい」と言わなかった理由の推理

先に述べたように、ばんざいは「番菜」であり、粗末なオカズと解釈できる。先に提示した①. 番菜・数・周り・雑用の位置づけの図を見て頂いてもわかるように、「番菜」は、社会的・経済的な地位でいえば両方ともに低い地位の人達の言葉である。一方「数」は社会的・経済的に高い人の言葉と位置付けられる。「周り」も少なくとも社会的な地位は高い人達のことだと推定した。

これらを前提に、マズローの欲求説を見てみる。第三階層の社会的欲求を求める人たちがいた場合に、その人たちがどのグループに所属したいかといえば、だれしもより恵まれたグループを望むに違いない。恵まれたグループには、社会的地位が高い人達や経済的に豊かな人達が多い。この人達と日常的な付き合いをする場合に、真っ先に注意をしなければならないのは恐らく言葉であろう。どんなに着飾っても言葉が下品であれば、お里が知れることになる。従って例えば「番菜」などという言葉は、使ってはならない。また家庭でも使わないような教育をしていく。「数」や「周り」であれば、恥ずかしくなく、むしろ自分の地位を高めることも可能だから積極的にこれを使うことになる。

第四階層の尊厳欲求についても考えてみよう。これは、自分が集団から価値ある存在と認められ、尊重されることを求める欲求である。他の人から尊重されるためには、他の人より

優れた部分がもちろん必要だが、逆に他の人より劣る部分があると難しくなる。例えば、「数」や「周り」であれば、社会的・経済的に地位の高い人たちの言葉だから問題は起きない。しかし「番菜」を使うと、これを集団はおそらく見過ごさない。自分より地位が低い人を尊重するのは恐らく難しい。従って尊重されたい人は、絶対に「番菜」を使うことはない。

これらを考えると、「おばんざい」と言わなかった理由はおのずと推定できる。

「おばんざい」と言わなかったのではなく、言えなかったのである。それは、「おばんざい」がその意味からすると適切な方言であるかもしれないが、それをつかうと自分の地位が周りから低く見られる可能性があるからである。逆に「おかず」や「おまわり」を使えば今の地位以上に見せることも可能なのである。従って積極的にこれらを使い、そう教育もしてきたのである。

人が生きていく為の術として、「おかず」や「おまわり」を使い「おばんざい」を使わなかったのだと私は結論づけたい。

最後に

冒頭の「京の食文化―大切にしたい心、受け継ぎたい知恵と味」の選定会議を筆者は傍聴している。このとき出席者の中から、「おばんざいという言葉はつかわなかった」、「おかずと呼んでいた」などという意見がでて、「おばんざい」という言葉が入った原案の修正が要求された。結果として「家庭のおかずいわゆるおばんざい」という微妙な表現に収まることとなったのである。余計なお世話かもしれぬが、この表現に落ち着くまでの京都市の担当者の御苦労はいかばかりかと思う。おばんざいという表現はメジャーな言葉である。これを京都市の広報に或いはブランド戦略に活用すればかなりの効果が見込めるであろう。これを否定すればその損失は計り知れない。一方これに反対する方もいる。しかも私の分類では在来の都人の方たちで発言力がある方たちである。これらを斟酌すれば誠に美味い表現を探し出したものだと感心している。

何はともあれ京都市が、たとえ「いわゆる」という接頭語（私はそう理解している）がついたにしろおばんざいという言葉が正式に表記したことは、賞賛に値する。なぜなら今こそ京都らしさを表現する何かを数多く世界に向けて発信するときであるから、そしておばんざいは、日本のさまざまな食の問題を解決するための有用な食文化であるのだから。

参考資料

※年中番菜録 嘉永2年 翻刻江戸時代料理本集成 第十巻吉井始子編 臨川書店

※おばんざい 京の味ごよみ 朝日新聞京都支局（編）1966年の「はじめに」に

「おばんざい」というのは“おかず”のことで、お飯菜の意と聞いています。」

